

ブログというパーソナル・メディア表象のリアリティ

長崎大学 光野百代

1. 目的

個人の自己表現活動は、現代の収益活動や、社会運動など、オンラインのコミュニケーションに依存する形をとる社会性において、重要性を増している。例えば、collective action に対して、コミュニケーションが組織化の原理となる協働活動を connective action という名前で位置づける研究は、インターネット上の個人的な表象に注目する。一方で、従来のメディア分析は、構築主義の視点から主に分析されてきた。前者の研究が、客観的構造（ネットワーク）を強調するのに対し、後者はディスコース等の人間が作る意味、考えによって形成される社会現象を強調する。しかし、個人の自己表現から結果として出現するオンラインの表象の分析は、実在主義または観念主義の立場に還元されない。なぜならば、下記のブログの事例で示すように、個人の表現活動は表象の出現に必要な一方で、個人が自分で認め、表現する内容よりも、それを結果として表象するブログはより複合的であるからである。この報告の目的は、個人による自己表現活動の文化的側面を、独立した、結果を引き出す影響（causal power）として分析する理論的アプローチとして、クリティカル・リアリズム（以下、CR）を検討することである。この目的に向けて、以下の問題を設定する。connective action のパターンに従わないブログは、どのように表象されるのか。

2. 方法

上記の問題に答えるために、この報告は、比較分析の方法を用いて、2005年頃から個人というカテゴリで、学校教師の経験を書くブログの事例を検討する。connective action と collective action の2つの協働活動のパターンに基づいて、この事例を個人の活動から成る前者型の活動として位置づける。事例では、個人が自分の経験に基づいて主張される内容（例えば、個人的に仕事に不満がある等）に、実際のオンライン・メディア表象は従っていない（人気ランキング等）。つまり、これは表象が、個人以上の構造的影響によって形成されていることを示唆する。しかし、結果としてのブログに connective action の特徴はない。この報告は、事例が connective action の失敗例、または、その事例ではない、として捉えるのではなく、このパターンに事例が従わないメカニズムを、CRのアプローチから検討して、connective action と比較する。

3. 結果

分析から2点の知見が得られる。1. 個人の考えから発生した意味や経験に基づいて、事例が発生したメカニズム。2. 構造分析と構築主義の分析とで、事例を捉える側面が異なるが、この2つを識別し、そして、つなぐアプローチをCRが与えること。

4. 結論

CRの理論的アプローチ、特にアーチャーの reflexivity 理論は、現代のパーソナル・オンラインメディア分析を、社会学的分析にするアプローチを与えることが示唆される。また、この報告は、小規模の調査に基づいている。CRアプローチを用いて、他の研究方法との比較の中で、さらに事例を検討する必要がある。

文献

Archer, M. (2007). *Making Our Way Through the World: Human Reflexivity and Social Mobility*. Cambridge: Cambridge University Press.